

25年後のふくい — 福井の目指すべき未来像 —

【パネラー】

国際基督教大学客員教授	八代 尚宏 氏
福井県PTA連合会会長	中井 玲子 氏
フクビ化学工業㈱代表取締役社長	八木誠一郎 氏
ふくいブランド大使	大谷 梨絵 氏
福井県知事	西川 一誠 氏

【コーディネーター】

福井県立大学経済学部長	原田 政美 氏
-------------	---------

◆ ふくい2030年の姿

皆さん、こんにちは。本日のコーディネーター役を務めます、県立大学の原田です。よろしくお願ひいたします。

本日は、先ほど竹中大臣にご講演いただきました、四半世紀後のこの国のかたちを示した「日本21世紀ビジョン」と、本年3月に県庁内の若手職員の皆さんが提言した「ふくい2030年の姿」を参考に、「25年後のふくい—福井の目指すべき未来像—」について検討したいと思っております。

知事は、昨年4月に県庁内の若手職員に「ふくい2030年の姿」の検討を指示されたと聞いております。25年後というずいぶん遠い未来を検討の対象にした考えについて、知事にまずお伺ひしたいと思います。

西川知事

25年後はずいぶん先のような感じがしますが、どうしてそういうことを考えたのか。先ほど竹中大臣は、この1、2年がたいへん大事だという話をされました。今が転換点であると言われた。そして、大臣の話をお伺ひすると、経済的な問題を中心にいろんな問題点を考え、日本の社会全体に将来の問題を上げていくという考えを示されたように、私は伺ひました。



福井県では、福井という47都道府県の1つの地域がこれからどうなるのか、ということを中心に、私たちの生き方、生活の仕方を描きました。私が描いたというよりも県庁の若手職員に自ら描いてもらい、私もいろいろ相談にのったという意味になると思います。

25年という意味ですが、これは後ほど八代先生にもお伺いしたいのですが、私は、25年とは一つの大きな社会変動の単位、一つの節目、そういう長さではないかと考えています。つまり、一つの世代が次の世代に完全に移り変わる長さではないかと思えます。前の世代が考えたけれども実行しなかったことを実行する世代、というのが世代交代だと私は思っています。世代が変わるといことは、考えが変わると同時に、人が変わり、行動が変わる。そして、社会的にも政治的にも国際的にもいろいろ変わる長さではないかと思えます。

私自身は、政治的にはマニフェストということで、議会の皆さんと協力しながら政治を進めていますが、非常に短期の、せいぜい4、5年の問題が議論されがちです。もちろんその中には、10年ぐらいに及ぶものもありますけれども、やはり短期、あるいは中期という感じですから、より長い議論もする必要があったと考えました。

そこで、何と言っても、政治には夢や希望が必要ですから、県庁の若い皆さんに福井県のこれからの生活の仕方を描いてほしいということで、いろんなトレンドを勉強し、レポートを作ってもらったという意識です。

◆ 日本21世紀ビジョン

ちょうど先ほど竹中大臣に基調講演をいただきましたが、国のビジョンでも同じように25年先だったわけです。これは何故だったのか。その理由と、それから「日本21世紀ビジョン」が示すこの国のかたちについて、ひと言で言うと、どのような国を目指そうとしているのか。この辺りを、八代先生にお尋ねしたいと思えます。

八代尚宏氏

八代でございます。本日はこのような席にお招きいただきまして、本当にありがとうございました。実は、福井は私の母方の地元でございまして、昨晚も家内と一緒に三国に泊まりました。私も子どもの時は東尋坊に何回も行き、そういう意味では懐かしく思っています。

今、知事がおっしゃいました「なぜ同じ25年というのを真似したのか」ということですが、その中身はまさに知事がおっしゃったのと同じ。25年は四半世紀であり、世代交代の一つの単位です。基本的には同じ考え方です。

それから、「日本21世紀ビジョン」をひと言で言うとどういうビジョンなのかは、非常に難しい話で、実はなかなか意見がまとまらないわけですが、今、竹中大臣がおっしゃいました「小さな政府」というイメージです。

私の個人的な見方、考え方で限定させていただきますと、この21世紀ビジョンが示すものというのは、「健全な市場社会」と言えるのではないかと思います。小泉総理も前から言っておられる「民でできることは民へ」、あるいは「国から地方へ」ということであります。

日本は戦後、「追いつき、追い越せ」という形で、米国とか欧州の豊かな国にキャッチアップする官主導の発展を遂げてきました。逆に、今は、アジアの国からキャッチアップされているところですので、いつまでも官主導で、「国が示したものを民が従う」、あるいは「国が示したものを地方が従う」というキャッチアップ型の体制ではもうやっていけない状況があります。しかも、そのキャッチアップ型の体制がいろいろな綻びを見せている。一つが、膨大な財政赤字でありますし、国民の債務負担である。その意味では、もう基本的に転換する必要があると考えます。



では、何に変えていくのかということですが、そこはやはり、今の世界、あるいは日本の豊かさを作った最大の源泉は、市場社会ではないかということです。競争して努力して成功した者が報われる。一方、努力しなかった人、企業はある意味では努力したところに置き換えられる。そういう仕組みが、努力してもしなくても同じである社会主義国よりも優れているというのは、もう既に分かったことだと思います。

では、「弱肉強食の市場社会」でいいのかというと、それは当然駄目ですので、セーフティー・ネット、機会の平等を国がキチッと責任を持つ「健全な市場社会」ですね。例えば米国のような医療保険を受けていない人が何百万人もいる社会ではなくて、カナダとかオーストラリアとか、市場社会であってもキチッと社会保障制度が完備されていて、教育の機会も充実している、そういう市場社会は世界にいくらでもあるわけですし、日本もそういう「健全な市場社会」を目指すべきではないかというのが、一つのメッセージだと思います。

具体的に何が重要かということ、先ほども大臣が言われたわけですが、まず、今の日本の豊かさは実は膨大な借金によって支えられているという現状認識が大事です。「21世紀にどんな良い社会になるのか」という話ですが、まず何も変えなければ今よりはるかに悪くなるということが、最初に書いてあるわけです。マスコミから、このような暗い話を先に書くのは、政府の責任転嫁であると批判もされたのですが、まず現状をキチッと押さえないといけないということから始まるわけで、こういう「避けるべきシナリオ」を防いで、本当に豊かな日本社会を作るためにはどうしたらいいかが、このビジョンに書いてあるわけです。

先ほど西川知事は、経済問題が中心ではないかと言われたが、私は決してそうは思っていない。県のビジョンと同じように生活を考えている。例えば、先ほど大臣も紹介しましたが「健康寿命」。単なる寿命ではなくて「健康寿命」である。あるいは、「開かれた文化創造国家」。あるいは、NPOとか民間の団体をもっと活用して、これまでの日本では「官」イコール「公」、つまり政府が全て公共サービスを提供していたのですが、公共サービスは民間でもNPOでも提供できるのではないだろうか。その意味で、国は本来すべきことに専念して、もっと地方や民間の力を活用していくことでやっていく必要がある。それから、生活と経済がこれからは一体化していくのではないか。住み良い生活を作っていくことが、また、雇用や需要を生み出すわけで、これは高齢化社会では不可欠なことではないかと思っております。

「日本21世紀ビジョン」は、福井県のビジョンと極めて整合的で、むしろ福井県のビジョンが、ある意味で「日本21世紀ビジョン」の先取りをしている面が非常に大きいと思っております。

◆ 産業・働き方の姿（知活福井）

この国のビジョンは経済問題のみならず、もっと生活を含めた点まで考えているのだということ、今ご説明いただいたと思います。我々の与えられました「ふくい2030年の姿」の中にも、いろいろ展開されているわけですが、その中でまず1番目に大臣も強調されていましたが、経済のことについて最初に触れてみたいと思います。

福井県の産業の未来像について少し考えるわけですが、本県には皆さんご承知のとおり、繊維、眼鏡、機械など、特色ある産業が集積し、優れたものづくり技術に支えられた製造業中心の産業構造でありました。ただ、バブル経済の崩壊後、生産額の落ち込みは著しいことも事実であります。しかし、これまで蓄積しました技術を生かして、最先端技術の開発を進めると、ものづくりの県としての再生も可能であろうと、普通考えます。

そこで八木さんに、県内製造業を担う若手経営者の一人として、本県製造業の未来像をどのように展望されているのか。今後グローバル化が一層進展する中で、県内中小企業が成長していくための戦略として、こうした考えに対してどのようにお考えなのか、伺ってみたいと思います。

八木誠一郎氏

フクビ化学の八木でございます。よろしくお願ひいたします。最初に司会の方から、若者の代表で大谷梨絵さんとの紹介がありましたが、私も実は若者代表で来たつもりなので、今ショックを受けております。

25年後をどうしようかという中で、まずは私の会社を何とか25年残していきたいと思っています。会社を経営する者にとっては、常日頃、一つの商品の部材を、今までの国内だけの問題ではなくて、世界という一つの基準で見なくてはいけないと考えます。ましてや、今までは情報を取るのに時間がかかったのに、ITとかインターネットで、今は一瞬にして地球の裏側まで情報が取れるような時代にきています。そういうことを考えると、立地要因とか、会社をどこに持っていくのかというのも、今、会社が福井にあります、その福井になくはない理由はどこにあるのかを、もう一回しっかり考えなければいけない時に来ているのではないかと、強く思っています。

でも、一つだけ、私たちものづくりメーカーとして肝に銘じていますのは、やはり「日本の市場は非常に厳しい市場だ」ということです。品質も厳しい。またお客様にお届けするタイミングも非常に厳しい。そしてお届けする価格も非常に厳しい。ですから、「メーカーとしてこんな品質でいいだろう」とか、「忙しいからちょっと遅くなってしまう」とか、「作るのにこれだけかかったから、この値段で買ってください」ということはもうとても言えない。やはりお客さんの立場に立った上での、品質、スピード、そして価格をどうやって提供し続けていくかというのが、本当に大事になってきていると思います。

また、先ほどから話があるように、市場が非常に難しくなっている中で、この福井は非常に恵まれていると思います。ものづくりメーカーがたくさんあります。その一つ一つのメーカーの事業領域というのは、これから非常に厳しい中で推移するかもしれないけれども、今まで培ってきた技術力、あるいは情報集積力などが集まっていると、また新しい力が出てくるのではないかと、今強く思っています。福井県の企業、メーカー、あるいは流通など、第1次、第2次、第3次産業の会社のいろいろなものを集めてきて、新たな展開を模索してい



かなければいけない。それを探していくと、福井ならではの技術ができ、福井ならではの商品がさらに出てくるのではないかと、今夢を持ってやっているところです。

そう考えると、とかく会社は自分の技術を隠したがりますが、やはり違った切り口で出し合っていくことが、これからの大きなキーワードになるのではないかと考えております。

今、品質、納期、価格といった、ある意味でものづくりの一番重要な部分に関して非常に自信があるという発言に、私には取れました。

さて、今、福井の製造業についてのご発言だったと思いますが、県内の産業は製造業だけではございません。「ふくい2030年の姿」では、農業や原子力産業などの分野についても触れております。若手職員が描いたこれらの分野の未来像に対して、知事はどのように考えていらっしゃるのか、伺ってみたいと思います。

西川知事

一般の産業については、様々な議論がこれまでもなされていると思います。特に製造業については、「福井を本拠にして世界市場を目指す」というビジョンが、25年後の姿としてあります。また、働く人たちは、高齢まで社会に役立ち、また働くことができる。これは、いわゆる「年齢観」を大幅に見直す必要があるということが背景にあるのです。

若手職員のレポートを作る際の認識として、農業は、これまで産業として議論されることが少なかったということがあると思います。農業については、古くて新しい問題ですが、ごく身近にある一種の産業的なフロンティアであるという認識が背景にあると思います。

レポートでは、「知活福井」という中で産業全体を述べていますが、知恵や技術、工夫をいろいろな産業面、あるいは従来は産業として十分認識されていなかったものに及ぼしていきこうという考えであるかと思います。そう考えますと、農業は知恵や工夫を加えるとますます産業として、また、新しい分野として発展するだろうということでもあります。

一例を挙げますと、福井県の水田は日本一と言っていい。圃場の整備が進み美田です。しかし残念ながら、そこからの生産性は、逆に全国的にも非常に低い水準です。これまでずっと米中心の農業なのです。米自身も新しい技術が必要ですが、野菜や他のいろいろな農業分野に拡げていくことが極めて大事だと考えます。そして、高齢の方も一生涯を通じて仕事ができる、また、先ほど議論がありましたが、「健康長寿」などにもつながっていく産業であるということです。

最近、中国に福井県産のスイカを売りに行って、アツという間に売れてしまう時代ですので、農業を、そして大事な社会資本である農地をしっかりと活かしながら、農地を減らさないで、そこで県民が健康や体力を考えながら産業としてこれを維持していく。こういう新しい農業問題についての方向付けを行っています。

もう一つは原子力の問題です。これも従来、あまり産業としては意識されなかったのですが、これについても新しいものの見方、戦略を考えています。原子力というのはなるほど、電力を供給するわけですが、そこには人材とか技術、潜在的研究分野があるわけです。

せっかく福井県には、従来から15基の発電所があるのですから、何とかして福井を拠点に、アジアの原子力産業あるいはエネルギー産業の教育研究機関として活かしていく。そして地元の産業に、原子力の未活用の技術を移転する。人材を集めて、教育機関として充実し

ていく。また、原子力の技術は、広くはがん治療などの医療の面にも深く関わりますので、福井全体がこうした医療、あるいはがん治療の中心地になっていくのではないかという方向付けを議論し、報告書にしているのが特色だと思います。

ただ今、産業についていろいろお話をさせていただきましたが、この産業を支えるのは、もう一方で働く人たちの問題もあると思います。そして、先ほど竹中大臣に講演いただいた中に出てきた「2007年問題」、つまり、少子高齢化の問題がついて回っているわけです。少子高齢化については、今後、「年齢観」も変わっていくだろうということで、将来の働き方の姿にも大きな影響が及ぶものだと考えられます。

福井県は平均寿命が男女とも全国2位。健康寿命も全国トップクラスであります。今後、若者はもちろん、経済の好循環を生み出すためにも高齢者の労働力を確保していくことが必要であるのは周知のことと思います。

そこで、国のビジョンでは、新しい時代の働き方についてどのような未来像を描いているのか。またその実現のために、「2007年問題」も含めてどのように対処していくべきだと考えているのか。八代先生にご紹介いただきたいと思います。

八代尚宏氏

まさしく2007年から人口が減り出すということですが、実は生産年齢人口、つまり15歳以上の働き手、労働者の基礎になる人口は、既に1995年から減り始めているわけです。その意味では、貴重な労働力をどのように活用していくかは日本全体の課題ですが、そのためには、高齢者、それから女性が働きやすい社会にしていくのが一番大きなポイントだと思います。

寿命が延びるということは、逆に働ける年齢も伸びるということですので、別に無理やり働くことはありませんが、楽しみながら働けるような仕組みを作っていく。そのためには、高齢者が若い人と同じような働き方をするのは無理で、例えば、週4日だとか、あるいは通勤ラッシュを避けて働くとか、フルタイムで働くことと引退することの中間的な働き方が自由にできるような、柔軟な働き方を作る必要があるのではないのでしょうか。「日本21世紀ビジョン」では、そうすることによって、60から64歳のまだまだ元気な人たちの労働力率が、今の54%から、2030年には65%まで上がる姿を描いています。

それからもう一つ。日本であまり使われていない潜在的な労働力が、女性です。福井県は共働き率日本一で、既に実行しておられるわけですがけれども、日本全体ではなかなか進んでいないのです。健康で働く能力と意欲を持っている女性が、まだまだ日本社会では阻害されています。

日本の働き方というのは、これまで男性が仕事、女性は家事や子育てに専念するというモデルで長くやってきたわけです。ただ、これは過去の高い成長の時代で、労働力がどんどん

増えた時代の働き方で、今後は、働く能力と意欲のある人は、年齢・性別に関わらず誰でも働けるような仕組みにしなければいけない。そのためには、やはり労働市場の規制、今の多様な働き方を妨げるような法律や社会保険制度、税制を変えていかなければいけないということです。

それから今、知事がおっしゃいました医療の話です。農業とか医療もやはり今後の成長産業であるわけで、特に、これから高齢化社会になると健康の維持に、非常に多くの人が関心を持つわけです。ということは逆に、そこに大きな市場が生まれるということです。医療を財政で考えると、これはもう負担が増えるということで深刻な問題なのですが、これをサービスと考えれば確実にお客が増える、非常に有望な市場であるわけです。

がん治療も今、急速に必要とされていますが、その意味で仮に福井で最先端のがん治療病院が幾つもできれば、全国から、あるいはアジアの国から治療を受ける患者が集まる。そうであれば家族もついてくるので、この人たちがいる意味で先ほどの観光とも結びつくのではないか。現に、日本から韓国に「検診ツアー」などもできている時代ですから、まさに国際的な意味で健康サービス産業を育てる余地は大きいと思います。

ただ、そのためには規制の問題をクリアしなければいけません。構造改革特区という新たな手段を活用して、福井県でまず、日本に先駆けてこういう近代的な病院を作れるような仕組みを考えていただくのが、一番大事だと思っています。働き方とそれに関連したサービスです。これは実は一体になっているかと思っています。それから女性の就業率を高めるために、良質の保育サービスをもっと大量に供給しなければいけない。そのためには、今の官の規制はやはり妨げになっているのではないかということです。

今、女性が働きやすい社会を実現するという話がありました。その点を見てもみると、本県では、例えば、25年後に現在よりも5歳ほど平均年齢が上昇して、おそらく50代前後ぐらいが社会の中心になるのだという予測が立っております。

そういう意味では、まさしく大谷さんの世代が社会の中心を担うことになるのだろうと考えます。報告書では「女性と男性が共立できる社会」にすることが不可欠であるとしております。若者、そして女性の立場から、働き方の面でどのような社会が実現したらいいと考えているのか、伺ってみたいと思います。

大谷梨絵氏

今、若者の立場、そして女性の立場という、二つの別々の視点で考えていることを話したいと思います。

まず、「50代中心の社会」ということで、まさに私たちの世代が25年後の福井を担っていくということは、実はすごく想像しにくいのが現状です。というのも、私の友人で県外の大学に行っている人たちは、そのまま県外で就職活動をして、なかなか職が見つからなく

て福井に帰ってくると、もっと見つからないという現状があります。それだけ福井には若年層、今の私たちの世代を受け入れるだけの受け皿がすごく少ないのではないかと思います。

ですから、そういう人たちが25年経って福井に戻ってきて、「さあ、福井をよくしていこう」とするかというと、それはちょっと考えにくいので、これはもう今から、



企業経営者の方々は次の世代を担う人材を積極的に採用してもらいたいと思います。

また、中小企業だと採用にそれだけお金をかけられない、コストをかけられないという問題もたくさんあると思いますので、例えば、県がバックアップして県外のUターンセミナーを積極的に行うような施策を行っていただけたら、25年後に高齢化が進んでも、過疎になって元気がない福井ではなく、元気な社会を実現することができると思います。

もう一つは、女性の立場でということですが、どんな雇用形態であれ、働く上で一番ネックになっていくのが子育ての問題だと思います。女性の育児休暇とか、保育所の問題とか、まだまだ課題は山積みですが、男女共立ということで、25年後は男性も一緒に子育てに参画できるような意識が生まれているといいと思っています。

また、ちょうど今40代、50代の方たちが、まだ元気なのにリタイアせざるを得ない状況の人も多いと思いますので、そういう人たちが自分の子どもや自分の孫だけではなくて、地域で生まれた子どもたちをみんなで育てていけるような社会を目指すと、男女共立で働きやすい社会ができるのではないかと考えています。

◆ 社会基盤の姿（四通八達福井）

今度は少し視点を変えて、25年後には新幹線とか高速道路の交通基盤が整備されることによって、福井県の位置がどう変わるのか。またこうした社会基盤を活かして県民の意識や活動がどう変わっていくべきか。こういった社会基盤から発生するいろいろな問題について考えてみたいと思います。

「ふくい2030年の姿」の中に面白いデータがあるので、まずご紹介します。それは検討会が昨年実施した県民アンケート調査で、「25年後に県民が住みたいと思う福井の姿」を選択させる設問で、「国際交流や地域間交流が活発で、県外から多くの人を訪れる地域」と答えた人が、実は5.1%しかいなかったという結果が出ております。11の選択肢の中で、下から2番目という、非常に数が少なかったということです。報告書では少しコメントを入れており、非常に少なく、福井は少し閉鎖的かなということまで書いております。

本県は、人口移動の少ない県とも、県民の気質が内向きとも言われております。このアンケート結果は、県外との交流をさほど重視してはいない、内向きの県民性を如実に表しているのかもしれませんが。これからの大交流時代に、果たしてこれでいいのか、という問題が書かれております。新しい時代の価値観として「内から外へ」、つまり福井県人の内向きの気質を外に向け、また外に出る気風への転換を求めています。

そこで、各種のキャンペーンなどで県外を訪れ、またふくいブランド大使として本県のPRに取り組む立場から、大谷さんにこのアンケート調査の結果をどのように受け止め、今後外に向かうためにどのような取組みが必要であるか、ご発言いただきたいと思ます。

大谷梨絵氏

私は、ふるさと福井の良さを知るには、やはり一回外に出てみないと分からないことがすごく多いと実感しています。実際の交流の面白さとか大切さは、経験してはじめて分かるものがすごく多いと思っています。ですから、国際交流や地域の交流について関心が薄いというのは、これまでいかに福井の人たちは外との交流が少なかったのかということも顕著に表している調査結果だと思います。

福井は自然に恵まれ、伝統工芸もあり、本当にとってもすばらしいところですが、それに気づくためには一回外に出て、自分の故郷を見つめてはじめて分かることが多いです。

私も実際、今とても福井が好きなのですが、思い返してみますと、そのきっかけになったのが、まず中学時代に福井市のジュニア大使という国際交流事業で、アメリカの姉妹都市に行ったことです。そして、高校時代にも福井県の姉妹都市、アメリカのニュージャージーに

県の派遣生として留学させていただき、今は、お市の方ということで県外に行って福井のPRをしております。

自分が福井のことを伝えるという立場で外に出ると、どのように相手に伝えるかということで、もう一回自分の故郷を見つめ直すとてもいい機会になります。今、福井が好きだというのは、多分そういうバックボーンがあったからだと思うのです。ふくいブランド大使もそうですが、これからも中学生、高校生をどんどん外に派遣生として出して、いかに福井を伝えるかというような機会を与えていくと、もっともっと福井を好きになる人が増えてくると思います。

福井はとてもすばらしい、それは改めて外から見るともっと実感できるのだ、という発言だったように思います。

ところで、この福井は今後、ますますアクセス基盤の整備が進むはずですね。そうしますと、ビジネスの面でも大きく変化が起きるのだと思います。企業経営者の立場から、八木さんには、これを契機にどのような未来が展望できるのか伺ってみたいと思います。

八木誠一郎氏

先ほど、中国市場の話があったと思うのですが、私は、確かに、同じ品質のものをたくさん作るという生産拠点と考えた場合、中国は大きな脅威になると思います。逆に、福井で差別化しながらものづくりをやっていくには、お客様と一対一で向き合いながら、お客様の要望される品質のものを、要望される時期にタイムリーに出していけるような、オンデマンドの生産体制を作り上げることができれば、この福井というロケーションは本当に恵まれていると思っています。

私たちは仕事柄、福井で作ったものを日本全国に毎日毎日、相当量をお届けしているわけですが、福井は本当に日本のど真ん中にあり、ほぼ全地域、翌日には配達、配送可能であるということです。中国から日本に SHIPPING していく時間的なロスに対して、私は極論を言えば、今日注文をいただき明日にはお客様にお届けできるような体制を持つことができれば、これは非常に大きなメリットになってくると考えます。そのためにも、お客様と一対一で向き合いながらやっていくことが本当に必要になってくると考えています。

そして、アクセス基盤もさることながら、先ほどから「内向きだ」という話がありました。でも、日本全国に行ってくれている営業の人たちは、福井県出身の人が非常に多いわけですが、決して心配することはございません。内向きの人は誰もいません。恥ずかしがり屋は多いのですが、本当にお客様から、「福井県民の方々は温かい」とおっしゃってくださいますし、「この福井弁は可愛い」ということも言ってくれます。「内向きだ」と思っているのは、ちょっと背伸びをしてしまうから内向きに思ってしまうのではないか。自分自身が背伸びしてしまうから、言いたい事をひとつ、ふたつ言えなくなるのではないのでしょうか。それより

も、やはりこれからは「個」の時代だと思うので、やはり福井のことを自信を持って言えるようになっていくこと自体が、一番大切ではないかと思っています。

アクセス基盤でもう一つだけお願いしたいのは、ライフラインから考えると、やはり若狭の道です。これは日本のためにも絶対必要なことだと思っていますので、実現すればそれこそ鬼に金棒になるのではないかと思っています。

「福井人よ、自信を持て」という発言だったと思います。我々のこの福井の社会についてですが、2030年には人口が減少していることは誰しもが予測しているわけです。そうしますと住宅とか道路などの社会基盤に余裕が生まれる時代になります。

そうすると今後は、資源を大量に使って新しく施設や道路を造る、そういう「つくる社会」から打って変わって、中心市街地、郊外、農村のそれぞれが持つ既存の施設や道路を有効に活用していく、いわゆる活用して「活かす社会」に移行していかなければならないことが見えてきます。

この点で国のビジョンではどうだったか、八代先生に伺いたいと思います。「都市と地方の新しいビジョン」を描いておりますが、今ある自然やインフラなどの基盤を活かすという観点を含めて、今後、どのように考えていくべきかを、伺ってみたいと思います。

八代尚宏氏

人口減少社会が今問題になっていますが、実は、既に人口が減少している地域は日本では非常に多いわけです。そういう意味で、私は、過去の豊かで質の高い人口がどんどん増えて来た高い成長の時代、その結果、国も地方も豊かな税収があった時代と、今後人口が減少し、かつ経済成長もどんなに頑張っても2%というような状況の下では、発想の転換をしなければいけないということです。

地域政策もそうであるわけで、これまでは人の住むところに道路や下水道など社会資本を充実していくのが、「国土の均衡ある発展」という一つの戦略であったわけですが、人口が減少する社会では、そんなことはもう到底できないのではないだろうか。では、どうするかというと、今度は逆に社会資本のあるところに人口を移していくということではないかと思っています。

ヨーロッパは元々、城壁都市の伝統もあったので、人が固まって住む。それ以外の地域が田園であり、都市と田園の差が非常に明確であったわけですが、日本はその区別が非常に小さい。したがって、下水道の普及率がいつまでも上がらないというのは当たり前のことではないでしょうか。その意味で、人口減少社会の政策は、やはりもっと固まって住まなければいけないのではないかと。

では、今まで住んでいる農村はどうするか。これは福井県のビジョンでも書いてあります「二地域居住」、もっと平たく言えばセカンドハウスとして、今の農村の地域を活用するよ

うな方向に持っていく。農業はどうするかというと、やはり零細農業から大規模農業に転換する。特に、個人ではなくて企業を活用したような形の農業に変えていく。それで、働く人はサラリーマンとして働く、きちんと有給休暇もあり、休日もあるというような働き方にしなければ、到底やっていけないということです。

それから今、中心市街地の衰退がどこでも問題になっていますが、私はやはり、中心市街地は人々の共有財産であって、単なる地主の独占的な財産ではないと考えます。したがって、中心市街地を活性化するためには、もっと競争を促進して、貴重な中心市街地を「誰が一番よく利用できるのか」という観点から、活性化をしなければいけないと考えています。

これは、これまでの様々な保護を通じて中心市街地を活性化するという考え方を180度転換して、競争をさせる方向に持っていくということです。一番高い値段をつけられる人に、貴重な公的空間を提供するメカニズムを導入することができるのではないかと考えています。これは私見も交えてですが、「都市と地方の新しいビジョン」は、やはり2003年を契機にして大きく変わるのではないかと考えております。

◆ 地域社会の姿（福縁福井）

都市と農村、中心市街地をどうすべきか。ヨーロッパのルールを踏まえて、ご発言いただきました。そこで、我々が今考えている地域社会の未来像について、少し違った角度からご発言をいただきたいと思います。

福井県は三世帯同居の割合は減少してはおりますが、他の地域に比べまだ高い状況にあります。また地域コミュニティの希薄化に起因する様々な社会問題が顕在化している中で、人々のつながりも根強く残っている地域であることは皆さんご承知のとおりだと思います。

今、地域の問題は地域自らが考え、解決していこうという気運が高まっております。防犯や子育ての分野において、地域で支える取組みが展開されようとしていますが、地域活動にも主体的に参加されている立場から、中井さんに、現在の福井が抱える地域社会の問題点を伺いたいと思います。

また、その解決策として、報告書では新しいつながり「福縁」による活動を広げようとしておりますが、これに対する考えも伺ってみたいと思います。

中井玲子氏

中井でございます。よろしくお願ひいたします。私事になりますが、私は専業農家に生まれ育ちました。朝、パジャマ姿で2階から降りてきた時から、隣のおじちゃん、おばちゃんが家に来られていました。「おはようございます」と朝の挨拶が自然に出て、「たくさん作っ



たから、美味しいから食べて」といただいたり、分け合ったり。そんな中で成長してきました。いろいろな人とのやりとり、また、人の思いやりを見ながら育ってきた私は、何がどう大事というよりも、そういう人と人のつながりを見てくることこそが、社会に出ても大事だと思います。

そのような私が福井のまちの方に嫁いで、とても田舎とは違うと感じました。隣近所のことを十分に知らないまま、また、私自身もあまり地域の中に溶け込んでいくことなく、職場と家庭との生活を繰り返しているだけでした。子どもを授かり、PTAの役員を受け、そこから地域の中に仲間として入り込ませていただいた時、いろいろな方がいらっしゃることを知りました。また、私自身が地域の活動や行事に参加する中で、私の子どもも一緒に活動するようになりました。

今、地域では、子どもだけを参加させて、親が参加しない方もいらっしゃいます。でも、子どもだけではなかなか地域の行事には参加しにくいようです。やはり、父親、母親が子どもの手を引いて、一緒に地域の中に入ってほしいと思います。地域では、一生懸命いろいろなことを運営する中で、世代交代も考えています。「もっと若い人に任せてみよう。冒険してもらおう」と考えてくださっていますが、そこに父親、母親、働き盛りの方がどれだけ来ているかという、やはり仕事が忙しくて、また子育てに追われていて、なかなか地域の中心となって動くのは難しいようです。

この「福縁」という言葉を知りました。本当に良い言葉だと思います。幸福をつなぐ縁、「福縁」。いろいろな目的で集まる仲間。私のプロフィールの中に書かせていただいた子育てサポート「輝生会」も、この「福縁」になります。私たちPTA、少し子育ての先輩の仲間が、若い母親の何か力になれば、ということで始めさせていただきました。いろいろな悩みを抱えて、どうしたらクリアできるだろうかと、出口が分からないでいる若い母親に私たちが通って来た道を少しお話することで、「あ、そういう解決策もあるのね」と気づいてくださいます。また、私たちが自分のたいへんだった子育てを振り返りながら、「大丈夫、一緒に考えて行こう」と言うだけで、「私は一人ぼっちではない」と気づいてくれた若い母親もいらっしゃいました。

今、母親が孤立しています。それは、やはり核家族が増えてきたからだだと思います。私は

三世代が同じ土地の中でスープの冷めない距離で家を持ち、一緒に生活するのも素晴らしいことだと思います。今の若い母親は、子育てに対して意欲をなくしているのではなくて、子育ての仕方が分からないのだと、私は感じます。祖父母と同居している方は、子育てをする中で、自分も親として育ててもらっているのだというのを感じます。私自身が、実はスープの冷めない距離で主人の両親と一緒に暮らしてきて、たくさん助けてもらいました。やはり子育ては、体験が一番だと思います。

今、核家族が増えている中で、地域の先輩方の力はとても大事です。地域コミュニティの再生が今叫ばれていますが、いろいろな人、いろいろな地域の力をこの子育てに、是非いただきたいと思っています。

朝、パジャマで起きて、隣の人と話しができる。非常に素晴らしい話を聞きましたけれど、この地域社会を支えるものに、もう少し違った側面があると思います。福井県ではボランティア活動の行動者率、あるいは人口当たりのNPO認証数のいずれをとっても全国でトップクラスであります。

そこで、この今話題になっています「福縁」。幸福をつなぐ縁という「福縁」であります。この「福縁」社会の実現のためにボランティア、NPO活動の重要性が一層高まるものと考えております。この点、知事がどのように考えているのか、ご発言を求めたいと思います。

西川知事

「福縁」という言葉は、このレポートを作った若い人たちが考えた言葉であり、一種の造語だと思います。幸せ、あるいは福井県の福につながっていると思います。

今、中井さんがPTAの活動の話をされましたが、福井県はまずボランティアの先進県。日本で一、二を争う先進県だと思います。先般の災害の場合でも、先進県であるが故に多くの皆さんが応援に来てくれましたし、福井県でいろいろな勉強もしてもらっています。また、福井県の人たちも全国に出かけ、実地の勉強をするという心構えであり、ボランティア先進県であります。これは行政とボランティアが協力をしながらそういう形になっています。

もう一つは、NPOの活動が非常に福井県は活発であり、大都市と地方とでは差があるかもしれませんが、人口当たりのNPO認証数をみますと全国で6番目に高いわけです。社会教育とか子育て、まちづくりなど、多くのNPOの集まりがあります。

それから、この「福縁」ですね。「地縁」、「血縁」というのは昔から福井県はしっかりした伝統基盤がありますが、こういうものがない所に新しい特定の目的を持った縁、ネットワークができるわけでは決してないと思います。元々、しっかりしたつながりがベースにあって、そして新しい目的のネットワークができるのだと、私は思います。そういう認識で、こういう「福縁」という言葉を使い、新しい形の目的に応じたつながりを大事にしたいということなのです。

その背景としては、先ほど竹中大臣も講演されましたし、パネラーの皆さんもおっしゃっておられます。「団塊の世代」がこれからリタイアをされます。こういった人たちの地域貢献です。これが非常に大事になってまいります。「団塊の世代」の皆さんは非常にパワーがありますし、そういう意欲をお持ちだと思います。世界を旅行されると同時に、地域で熱心に、かつ深く活動される人たちではないかと、私は思うのです。

こういう意味で、「団塊の世代」の皆さんが定年を迎え、そしてそうした人たちが世代を超えて、あるいは仲間意識を強めながら、子育て、あるいは防犯、まちづくりなど、いろいろな目的の中で活動する。こうした人たちの大きい力を得て、子育てにおいては最もしっかりしたネットワークを持つ「子育て日本一の福井県」、「安全・安心の福井県」が、これから20年後、あるいは25年後にできて欲しい。また、しなければならないということ「福縁福井」で表現しようとしていると理解しています。



◆ 人・人づくりの姿（夢福井人）

お手元の概要版第2部の4番目に「夢福井人」があります。ここは、教育や人づくりなど、人にかかわる問題について述べています。最近、親のわがままを子どもに押し付ける家庭も増えてきている。もっと親や社会は、子どもの目線でアドバイスして支えていく社会にしなければならないということが重要、という指摘をしております。

そこで、母親として、また長年子どもの保育や保護者活動に携わってきた立場から、現在の教育、人づくりの問題点をどのように捉え、今後どのような改善策、解決策が必要だと考えていらっしゃるのか、改めて中井さんに発言していただきたいと思います。

中井玲子氏

私は、母親としての子育て、それからもう一つ、保育士としての保育を精一杯させていただいてきました。22年間保育をさせていただいた中で、短大を出てから保育士になった頃と比べ、現在の保育がずいぶん変わってきたのを感じます。

当時は、母親がたいへんな中、支援していこうというのが保育所の役割でした。ところが

女性の社会進出をというところで、長時間保育、早朝保育など、いろいろな制度が出てきました。現場にいた私には、母親にとってはたいへんありがたい、良い制度だと思いました。でも、これが、子どもたちにとってどうなのか。迎えが遅くなり、「お母さんは、まだ？」と不安そうに何度も聞きながらやってきた子どもたちもいました。

母親が外に出て、仕事をされることはとても大事なことですけども、親子の関わりの点では、子どもたちの心が淋しいという点が大きくなり、だんだん育ちにくいと感じてきました。また今、少子化に何とか歯止めをかけなければならないというところで、保育サービスの充実が当たり前になってきてしまったのも感じます。支援ではなくて、子育て代行になりつつあるのを現場で感じてきました。ある母親からは、保育所に入れれば、離乳食を食べさせてもらえて、おむつも取ってもらえる。「先生、何でもしてもらえますよね」となってくると、保育所の制度のあり方がちょっとズレてきてしまったのではないのかと思いました。

やはり、母親が一生懸命頑張ってる子育てをしているのを、子どもたちが感じるところで育っていくものなのだと感じてきました。そうしますと、今いろいろなことを県の施策としてやってくださり、また国も考えていますが、子どもたちの心の成長、親子の心のつながりを考えると問題なのではないのか、という気もしています。

私ありがたいと思ったのは、男性の育児参加です。それを可能にするには、やはり企業の理解がないといけないと思いました。そんな時に、県が、そういう企業に対して支援をする制度をつくり、少しでも父親が家庭での育児にかかわる時間が長くなったら、これは子どもにとってはとてもありがたいことだと思います。

また、「子どもの目線で」と考えられた2030年。これも本当にその通りだと思います。今、不登校になって学校に行けない子どもには、いろいろな理由があります。そういう子どもたちを見ていますと、「自分たちが行きたい」、「行って楽しい」という学校ではなくなってきている。その子にとっては学校に行くことがとてもハードルが高くて、辛いのだろうなと思います。そう考えた時、子どもたちが毎朝、元気に玄関を出て行くような学校が、2030年にはどういうふうに出て上がっているのか、夢を持ちます。

今、子どもたちは友達関係も難しくなっています。一生懸命自分の気持ちを伝えたいのですが、それが相手に伝わりません。それにはやはり携帯メールやパソコンでのメール、いろいろなことがあるみたいです。世の中が便利になっていけばいくほど、子どもたち自身が育つのが難しくなっているのを感じています。そういうところを、私たち大人が子ども目線でサポートしながら、どんな学校が、どんな教育が楽しいのか、また、自分たちに必要だと考えられるのか、そういう学校教育、家庭教育を考えていかなければならないと思っています。

P T Aの世界にいますと、家庭教育力の低下ということをよく言われます。「子どもが育つ前に親が育っていない」という小言をたくさん頂戴します。私自身も含めて、親として頑張るべきところは頑張り、また地域の方に助けていただくところは助けていただき、社会の制度として良い制度は使わせていただく。そのバランスを上手くしないと、子どもたちのこ

れからの健全育成は難しいと思います。そういうことを、いろいろなお考えをいただきながら、私もPTA活動を精一杯頑張りたいと思っています。皆さんの力がとても大事です。子どもたちの教育、健全育成のために、皆さんが参画してくださることを心から願っています。

子どもの目線が非常に重要だというご指摘。竹中大臣の講演の中で、ホームページへのアクセス件数の話がありました。日本の将来に子どもたちがものすごく関心を持っているという指摘がありました。こういう子ども、そして我々大人も含めて社会をどうやって支えていくかがかなり重要だというご指摘だったと思います。

もう1点、将来の地域経済、地域を考えるとという点での人材育成があります。グローバル化が進み、一生自らが学んでいなければならない時代になるのだらうと思います。国際標準の行動力を持った人材の育成がますます重視されます。

そこで、企業経営者の立場から、これからの時代にはどのような人づくりが必要であるか。また人づくりのための企業貢献も求められておりますが、その点どのようにお考えなのか、八木さんから発言をいただきたいと思います。

八木誠一郎氏

これから企業が発展し、社会にとって、会社の存在そのものが需要かどうかというところをいろいろ考えてみると、皆さんも最近よくお分かりだと思っておりますが、いろいろな企業の一部の方々の考え方の間違いがあって、会社そのものがなくなってしまったり、非常に大きな問題が起きたりしています。

そこに勤めているほとんどの方は、真面目に一生懸命やっているにもかかわらず、一部の間違った考え方で、せっかく築き上げた信用と暖簾がなくなってしまうことを、本当に、日常茶飯事のように見ます。そうなってくると、土台としてしっかりと置かなくてはいけないのは、まず、育成するよりもむしろ、自分自身がどれだけ真っすぐに物事を見てやっていかなくてはいけないか、真っすぐに物事を見ることが出来るか、そういう企業活動をしていくことができるかどうか、に尽きるのではないかと考えています。

そして、やはり企業とは一瞬にしてできるわけではないですから、過去の歴史があって、そして今がある。それを礎として未来があるわけですから、それぞれの企業が持っている文化、また、その何を必死になって守り抜いていかなければいけないか、あるいは本当に勇気を持って何を捨てなければいけないかということの知恵をいかに出し合っていくかということが、本当に重要だと思います。

そして、その知恵は経験から出すのではなくて、それは次から次へと世代の交代が出てくるわけですから、私たちが将来どういう会社にしたいか、どういう社会にしていきたいか、その中でどういう企業として残らなくてはいけないかという真っすぐの視点を見ながら、みんなで見出し合うような時代に来ているのではないかと考えています。そういうことを、まず、私たち

経営者が襟元を正し、そして同じような共感を持つ若い人たちと一緒に頑張っていきたいと思えます。

求める資質としてはやはり、明るくやってほしいですね。まず明るくしていただきたい。朗らかに。そして、背伸びする必要ない。それから僕は福井を大好きな人が好きです。日本を大好きな人が好きです。それから親を尊敬する人が好きです。そういう人たちが増えていくような社会に、一企業としても企業活動を通して頑張っていきたいと思っています。

この人材に関して、もう一つ、フォーラムの出発点の事実ではありますが、人口減少の問題があるわけです。この人口減少は必ずやってくる。そうしますと、できるだけ人口を減らさないようにする努力、工夫があるのだらうと思います。魅力ある子育て環境を作り上げて、全国から子育て世代が福井に集まる。こういった方策が必要だということも、一方で考えられるわけです。

この点について、「当然、男性も協力しなければいけない」と先ほど発言がありましたが、ひとまず女性の立場から、こうした未来像を実現するためには今何をすべきか、この点を中井さん、大谷さんのお二方から発言いただきたいと思えます。

中井玲子氏

では年功序列ということで、私から。やはりこの福井は、自然環境にとっても恵まれています。でも最後はやはり人と人のつながりだと思っています。学校現場で一生懸命熱心に指導してくださる先生がいて、それを信頼し任せる、そういう保護者になりたいと思えます。

また、地域の方との結びつき、家族の中での結びつきが強く、福井県の人とは思いやりのある温かい人間性だ、と言っていていただいています。それは私自身とてもうれしく思います。子育てがたいへんだということが先行するのではなくて、たいへんな中にも、これだけの喜びがあると感じるのは、やはり人と人のつながりだと思っています。そんな環境を福井の誇りの一つにできればいいなと思っています。

大谷梨絵氏

私は、結婚、子育てをまだしたことがないのですが、どんなところで子育てをしたいかと考えると、もちろんいろいろな政策とか、保育所がどうというものもあるのですが、やはり子育てに関してすごく理解のある人に周りにいてほしいという思いがあります。

25年後、そういう社会を実現させるためには、まず、一人ひとりの家庭の中からの教育が必要だと思います。これまでは、例えば「女の子なのに料理もできないの」という言葉をよく聞いたりしたのですが、これからは男性にも、もちろん将来家事をしてほしいということではなくて、是非、家事とか子育てをしている人に対しての理解のための教育をしていってもらったら、将来、子育てができる環境が育つような気がします。

これまで、地域社会、人のあり方について発言をいただきました。この点について、国でもいろいろ議論されたことだと思います。

そこで、八代先生に、今後、国民が考えて行動していく上で最大のポイントは何か。こういったところを含め、更に福井と地域にどのようなことを期待するのか、一言メッセージをいただきたいと思います。

八代尚宏氏

ひと言で言いますと、今後の人口減少社会では過去の成功したモデルにこだわってはいけないということです。要するに、あらゆる面で大きな転換をしなければいけない。それはもうあちこちあるのですが、今は議論になっていることに関連で言えば、一つは、これまでの結婚した女性は働かないことを前提とした仕組みを、働くことが当たり前の社会に変えていかなければいけないということです。これは一番大きなポイントだと思います。

その時に鍵になるのは、やはり働き方と保育であり、これは企業の理解だけではないわけで、企業自体の努力も必要ですけど、国の制度としてやはり長期雇用だとか年功昇進だとか、専業主婦を持った男性をベースに考えられている仕組みをまず変えていく必要があります。ワーク・ライフ・バランスといいますか、男性も女性も共に働き、共に家事、子育てをする欧米型のモデルに変えていかなければいけないというのが一つであります。

それから保育について、中井さんが言われた点でやや異議があるのは、保育所がどうあるべきかは、保育所や保育士ももちろん大事ですけど、一番大事なのはユーザーです。これまでは保育所を福祉として考えてきたのですが、これからはやはり、サービス産業として考えなければいけないということです。

つまり、ユーザーが何を求めているかをベースに、やはり変えていかなければいけないのではないかと。保育所を利用する人はこれまでの福祉であれば、ごく一部の貧しい人たちであったのですが、これからはほとんど全ての人が使う、普通のサービス産業であるわけで、質の高い公益的なサービス産業に変えていかなければいけない。その時の一番の声は、やはりユーザーの声なのです。

ですから、例えば、子育て代行ではいけないということなのですが、もしそれがユーザーの声であれば、それで何故いけないのかという視点も大事ではないかと思うのです。そういうのが一つの発想の転換ではないかと思うのですが、そういうことも含めて、やはり過去の成功モデルを変えていかなければいけないと思っています。

◆ おわりに

保育所に対する視点も少し変える必要があるというご指摘だったと思います。時間もそろそろ予定の時間になっておりますが、最後に知事からの発言を求めたいと思います。

県では、「ふくい2030年の姿」を一つのたたき台に、本日のパネラーの方々を始め、県民の皆さんからの意見を得て議論を深めたいとしております。今後の県政にどのように反映していこうと考えていらっしゃるのか、この点を知事に伺ってみたいと思います。

西川知事

今日は、いろいろな方面からのご意見をいただき、本当にありがたく思っております。最後にとのことですので、この「ふくい2030年の姿」について、今後の反映の仕方などの問題について申し上げたいと思います。

一つは、ざっくりばらんに言いますと、このレポートは、内容がデッサン的な荒削りの手法で表現した、また、概略を描いた部分があるということです。検討会のメンバーは、自分たちの考え、県民の皆さんへのアンケート、有識者や経済界の人たち、県立大学を含めた大学の学生の皆さんなどいろいろな方の意見を聞き、また本なども読んで勉強をし、その思いを込めておりますが、やはり若い人たちの作ったもので、詳細な意味では完全ではありません。

かつ、ここに書いてあるものは一部の項目であり、まだ倉庫の中にはいろいろ思っていたことがあるのですが、「ここまで書くのは方向としていいのか」とか、「全体にどういう表現が分かりやすいか」ということで、たくさん残っているものがあるように私は見えていますので、それもこれからどのように活かしていくか、ということがあると思います。

そしてこのレポートについて、県内外の人たちに意見をいろいろお伺いしましたところ、

一つは「まだまだ見やすくないのではないか」、「若者が作ったのだから、もっと大胆な発想をしてもよかったですのではないか」、更に「自慢するのは変かもしれないが、福井の良さをもう少し前面に出しても良かったのではないか」というような意見が出ております。

これは一度作って終わりではなく、国でもこれからのお考えがあると思いますが、多



くの人の意見なり、描ききれなかった部分なり、今後の経済社会の動きも一年一年変わってきますので、改造するといえますか、加えていくことが非常に大事だと思います。

今回、福井県としてこういうレポートを作りましたが、まず、地方が自ら考え、作ることが大事で、これは国にいろいろなものを申し上げる機会にもなります。また、職員の意識改革にもなったかと思えます。予習というか、この会合でも先に席に座っていると、どんな人がお座りになるのかよく見えるわけですし、後になるとなかなか勉強にならないわけです。

また、従来の常識、あるいは通念を破ることはなかなか勇気のいることです。しかし、前持ってこうしたレポートで描くことによって、「レポートにこういうことでまとめてあるのだから、我々が今このようにすることは、こういう意味があるのではなかろうか」という問題提起の良い手段、道しるべになるのではないかと、私は最近思っています。それから、将来のことを考える土台がこれまであまりなかったのが、県民の皆さんが福井のことを考え、そして日本の将来を考える良い契機になるのかなと思います。

何と言っても、日本人の場合、「夢を語る」のは非常に少ないというのが私の実感です。かつ、「夢を聞いてあげる」というのはもっと少ないというのがこの日本の遅れたところだと思います。それを良くしていく。みんなで夢を語り、それに聞く耳を持つ。そして、国においても、地方においても、良いものは実行するという契機になるといいと思っております。

本日は、「日本21世紀ビジョン」と「ふくい2030年の姿」を参考に、25年後の福井の姿について展望いたしました。検討会がまとめた報告書には、県民の皆さんが地域の未来像を考える上で、参考となるデータや視点が数多く盛り込まれております。

本日のディスカッションでは、基本的に報告書の第二部のみを取り上げております。第一部は25年前の福井の姿を検討しながら、それを参考に25年後を構想する形になっております。そういう意味で、第一部もかなり参考になる、たくさんのお事実を書き留めております。ぜひこの機会に一読されることをお勧めしたいと思います。

それでは時間となりましたので、パネルディスカッションを終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(終了)